

ただいま卒業証書を授与致しました378名の卒業生の皆さん。
ご卒業おめでとうございます。そして、保護者の皆さま、お子様のご
卒業心よりお祝い申し上げます。コロナ禍の中保護者の皆様の参列
を得て、第22回卒業証書授与式を挙行できますこと、大変嬉しく思
っております。

私は皆さんが入学した3年前にこんなことを話しました。

清水区出身の広瀬すずさん演じる百人一首の競技カルタの世界を
描いた「ちはやふる」の映画の話です。

「揺れ動く人間模様、青春期の不安定さ、心の葛藤、目標をひたむ
きに追いかける純粹さを余すところなくこの映画は表現しています。

みなさんの学校生活がこの映画のようにドラマチックに進むわけ
ではなく平凡に過ぎ去る日常の中で、思い通りにいかなかったり、目
標を見失ったり、挫折したり、苦しいこと辛いことも多いでしょう。

しかし、決してそこで立ち止まったり、あきらめたりすることなく、
そのあるべき姿、理想に向かって努力し、成熟していったほしいので
す」とこう皆さんに語りかけました。

けれども皆さんの青春の総仕上げとなるはずの3年生の一年間は
環境が激変しました。新型コロナウイルスが世界を、日常をあっけな

く変えてしまったのです。

理不尽にも夢や希望を突然奪われたものの悲しみ。目指していた試合や大会、イベントが次々と消えていく虚しさ。友との語らいさえも許されない日々。ゴールのない毎日を私たちは走り続けなければなりませんでした。

あきらめる理由、現実を耐える理由を探す毎日。答えが見つからず苦しみに身もだえした日々がそこにあったと思います。

「人生にはプラスがあったり、マイナスがあったり、でも、結局差し引きゼロが人生というもので、それが一番幸せなのかもしれない」とある人は言います。今までのような日常が保証されている状況下なら、この言葉を受け入れることもできるでしょうが、今の皆さんには到底受け入れがたい、マイナスばかりが目につく一年間であったかもしれません。

しかし、校内の行事は規模を縮小したり、時間を短縮したり、ずいぶん工夫して予定通り実施されました。殊に建学祭や体育祭での皆さんのほじける笑顔、歓声、友と喜びを分かち合う姿を見て、私自身がほっとしたことを覚えています。

新型コロナウイルスは多くのものを皆さんから奪いましたが、皆

さんはこれまで得ることができなかったもの、感じることはできなかったものを手にすることができたように思います。

生きていれば、新たな希望や喜びが必ずやってきます。76年前に片道切符で戦場へ赴いた若者たちとは違います。奪われた時間は戻ってきません、過ぎ去ったことをいつまでも、嘆き悲しむのではなく、「夢は必ずかなう」と信じて、挑戦し続けてください。

アメリカ先住民の言葉です。

「君が何となく生きた今日は、昨日死んでいった人たちがどうしても生きたかった大切な明日だ」

自分には何となく将来、約束されているような時間がある、そのことに甘えて日々努力すること、一生懸命生きることがを忘れていないだろうか。この言葉は教えてくれている気がします。

生きること生きていること自体が素晴らしいことである、そのことに常に感謝し、謙虚な気持ちで日々を大切に生きていってほしい。洋々たる将来がある皆さんも時間を浪費することなく、夢や希望に向かって汗を流してほしいと願うのです。

卒業生の皆さん、皆さんが人生のどこかで振り返って静岡翔洋高

校時代が一番楽しかったという思いを持ったとしたら、それは、私たち教師にとって大変うれしい言葉です。しかし、それは同時に静岡翔洋の教育が成功したとは言えないことを意味しています。なぜなら、私たちの目指したものは、高校生活で培ったものを生きる力に変えて、よりよい未来、素晴らしい人生を築くこと、そのための力を育てる教育にあったのですから。

どうか、高校時代は最高の思い出、素晴らしい青春の日々だった、でも、もっと今は充実した幸せな日々を過ごしていますと言える人生を送ってください。

静岡翔洋高校からは悠久の姿をとどめる美しい富士が見えます。
永遠^{とわ}にそびえ立つ富士のように皆さんの仲間と培ってきた友情もいつまでも続くことでしょう。

翔洋生らしく雄々しく、自らの抱く希望に向かって歩みを進めてください。希望こそ生きる原動力です。素晴らしい人生の「門出」となることを祈念致しまして、「告辞」といたします。

卒業おめでとう。